

自己教育力を育てる学級経営

—— 生徒理解と教育相談を通して ——

玉城村立玉城中学校教諭 井 上 律 子

目 次

I	テーマ設定の理由	61
II	研究仮説	61
III	研究の内容	62
1	自己教育力の育成と学級経営	62
(1)	自己教育力の目指すもの	62
(2)	自己教育力を育てる学級経営	62
2	自己教育力の育成につなげる生徒理解	63
(1)	生徒理解の必要性	63
(2)	教師の基本姿勢	63
3	生徒理解を生かした教育相談	64
(1)	学級担任による教育相談	64
(2)	生徒理解と教育相談の年間計画	64
(3)	学級教育相談の意義とねらい	66
(4)	教育相談カードの作成	66
IV	実践	66
1	学級の実態	66
(1)	日常の観察より	66
(2)	ソシオメトリック・テストによる分析	66
(3)	生徒理解カード（POEM）検査より	68
2	学級担任としての援助のあり方	68
(1)	学級集団への援助のあり方	68
(2)	生徒一人一人への援助のあり方	68
3	個人相談実践例	68
(1)	孤立児K夫への援助と指導	68
(2)	学業不振児A男への援助と指導	69
V	研究のまとめと今後の課題	70
1	研究のまとめ	70
2	今後の課題	70

自己教育力を育てる学級経営

—— 生徒理解と教育相談を通して ——

玉城村立玉城中学校教諭 井 上 律 子

I テーマ設定の理由

21世紀に生きる子供たちに対して、学校教育においては「自己教育力を育成すること」が強く求められている。それは、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図ること」として、『学習指導要領』第1章総則第1にも明示され、学校のエデュケーショナル・アクティビティを進めるに当たっての基本理念の一つにあげられている。高齢化、情報化、国際化と多様に変化していく社会の中であって、生涯を通して学び続け、たくましく生き抜いていくための能力として、自己教育力は不可欠なものとなってくる。

ところで、自己教育力とは、中央教育審議会の「審議経過報告」によると、「主体的に学ぶ意志・態度・能力」と定義されている。具体的にあげれば、

- (1) 学習への意欲を育てること
- (2) 学習の仕方を習得させること
- (3) 生き方の探求をさせること

となっている。

これまで、より良い生き方を探求させる視点から、自己教育力のある生徒の育成を目指し、学級担任として主に学級活動、学校行事などの特別活動を通して実践してきた。しかし、主体的に学び、行動し、より良い生き方を探求していく態度を生徒に十分に育てることができなかった。それは、学級集団に所属する一員として活動させることが中心になり、生徒一人一人に対する理解が不十分だったことに起因する。具体的には、主として次のような働きかけをしていた。

- (1) 家出、怠学、喫煙など、問題行動を起こす生徒に対して、問題行動を取り除こうとする指導に終始していた。
- (2) 「学校の規則は守るべきだ、勉強はやらなくてはならない」式の訓育的・管理的な指導が強かった。
- (3) 目に見える結果や行動で生徒を理解し、内面的な葛藤をもつ生徒への指導・援助が十分にできていなかった。

これらの指導は一時的な効果はあっても、問題の根本的な解決には至らなかった。そして、教師の指示するとおりに行動する、いわゆる指示待ち人間にしまい、自ら学び、主体的に行動できる自己教育力のある生徒の育成につながるものではなかった。

生徒は学級という集団に属しながらも、かけがえのない一人の人間である。主体的に学び、たくましく生きる能力としての自己教育力を培うためには、生徒個々に対する細やかな理解と援助がなくてはならない。特に、青年前期にあたる中学生は、身体的・生理的に著しく発達するときであり、心理的にも大きく揺れ動いている時期である。学級集団の中で、個性をいかんなく発揮でき、現在の生活に適応し、情緒的にも安定していることが基盤となっはじめて、より良い生き方を探求していく生徒が育っていくものである。さまざまな問題行動や不適応行動に対しても、学級担任がより深く生徒を理解し援助していくことによって、その解決策につながっていくものではないだろうか。生徒一人一人に対する確かな理解と、それに即した適切な援助・支援は、学級経営を充実させるための根底をなすものである。

多角的・多面的な生徒理解と適切な教育相談を通して、生徒は自己理解を深め、より良く生きていこうとする自己教育力をもった人間に育っていくものだと考える。学級担任として、そのための具体的な方策を探るべく本テーマを設定した。

II 研究仮説

学級担任の確かな生徒理解に基づく適切な教育相談を行うことで、生徒一人一人のより良い資質・能力・態度を育てる援助につながり、自己教育力を育てる学級経営ができるであろう。

Ⅲ 研究の内容

1 自己教育力の育成と学級経営

(1) 自己教育力の目指すもの

多様化し激変する社会の中にあっても、自己教育力をもつ生徒を育成する必要性が重要視されている。自己教育力の育成は、どんな社会にあっても、たくましく生き抜いていく生徒を育てることを目指しているものである。その自己教育力の具体的な内容として、次の三つがあげられている。

① 生き方の探求

生き方の探求とは、どのような条件の下にあっても向上心を失わず、自己を大切にし、自分の人生をつくり上げていく力を育てることである。予測しがたい21世紀に生きる生徒たちに、自分の意思で、自分のより良い人生をつくり上げていく態度を育てることは、学校教育に課せられた大きな課題である。とくに、「生き方の探求」については、道德教育、進路指導、生徒指導において、その具体的な方針が、現行の学習指導要領の中に示されている。

② 学習への意欲

学習への意欲は、自ら学ぶ意欲を育てることであり、生徒にやる気をもたせることである。社会の変化に主体的に対応できる人間に育てるためには、自ら学ぶ意欲を育てることが必要である。そのためには、学習への動機づけを工夫し、学ぶことの楽しさや充足感を味わわせることが大切になる。体験学習など学習の手段や方法の工夫が重視され、生徒の能力、適性、興味、関心に配慮した教育が必要とされている。

③ 学習の仕方の習得

学習の仕方の習得とは、何をどのようにして学んでいくかという、学び方の知識と技能を身に付けさせるものである。これは、生涯学習の基礎を培う観点からも重要なものとなる。『中学校学習指導要領』で、「基礎的・基本的な内容の指導の徹底」が打ち出されているが、基礎的・基本的な内容を学ばせていく過程で、学習の仕方の習得を図りたい。そのためには、問題解決的あるいは問題探求的な学習方法が有効だとされている。

(2) 自己教育力を育てる学級経営

学級経営とは、一般に「学校経営の基本方針のもとに、学級を単位として展開されるさまざまな教育指導の成果を上げるために必要な諸条件の整備を行い、運営すること」とされる。その学級経営の内容としては、学級経営計画の作成、人的条件の整備、物的条件の整備、学級での教科学習、道德教育、特別活動の効果的な運営、生徒指導の推進、学級事務の処理などがある。自己教育力の育成につながる学級経営についてまとめる。

① 学級担任の役割

学級は、生徒にとって学習の場であり、生活の場である。意欲的・自主的に学習する学級、お互いを認め合い、支え合い、励まし合うことのできる学級をつくりだすことが学級担任の責務である。そのためには、学級担任が、生徒一人一人をかけがえのない存在として受け入れることが大切である。そして、生徒一人一人に肯定的態度、受容的態度で接する。教師に自分の存在を認められていると感じさせることが、生徒たちの精神的な安定につながっていく。次に、生徒をより深く理解していくことである。自己教育力が、主として情意的側面にかかわるものだけに、生徒の内面理解ができなければ、生徒の心を動かすことはできず、意志・態度の形成も不十分となる。また、中学生は心理的に動揺しやすく、少しのことで、落ち込んだり有頂天になったりするものである。そのとき、学級担任は生徒に即した援助・指導をしなくてはならない。このように考えてくると、教師と生徒、生徒相互の好ましい人間関係をつくり出すためには、学級担任が生徒理解と教育相談に通じていることが大切になる。

② 望ましい学級集団

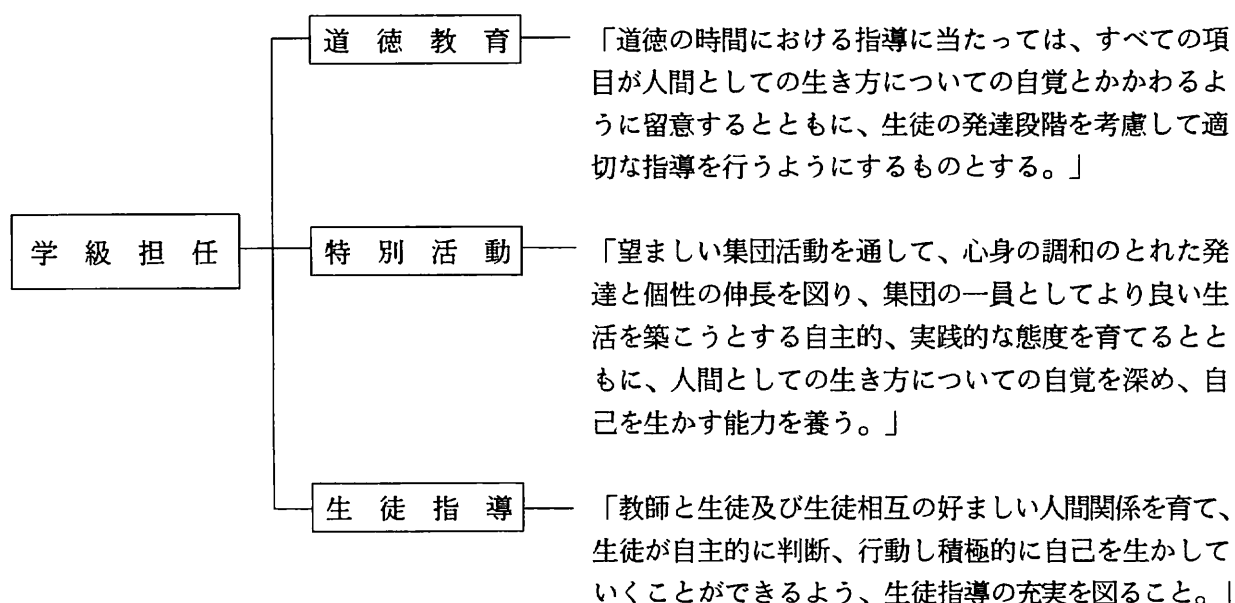
自己は他との関係、つまり、集団の中で高められていくものである。教師、友達、集団との交わ

りの中で、お互いの長所を認め合い、助け合い、励まし合い、学び合う中で、自分の良さを発見し、自己の向上に努めていく。とくに、思春期といわれる中学生にとって、仲間関係の影響は極めて大きい。学級集団との生活が楽しめなければ、それはそのまま学校生活が楽しめないということの意味する。学級集団から拒否されたり孤立する状態が続けば、やがてそれは登校拒否、引っ込み思案、いじめなど心理的な不適応の状態となって現れてくるであろう。

自己教育力の育成はもちろんのこと、学校生活への適応を図るためにも、学級における好ましい人間関係が基盤になってくる。個が生きる集団を土台にして、学習への意欲も学び方の習得も可能になる。また、学級集団の中での存在感や価値観が、それぞれの将来の生き方の方向づけにも影響してくるであろう。自分の個性を伸び伸びと発揮できる居心地の良い学級集団が、自己教育力を育てるのに望ましい学級集団ということになる。

③ 「生き方の探求」と学級担任

学級担任は、「生き方の探求」と深くかかわることになる。学級担任が指導を行う道徳、特別活動、生徒指導と「より良い生き方の追求」との関連を、現行の『中学校学習指導要領』をもとに整理してみる。



生徒は、それぞれ顔かたちが異なるように、その個性や能力も十人十色である。一人一人により良い生き方の援助を行うには、生徒それぞれの長所や短所などその特徴を把握する必要がある。すなわち、生徒理解が前提となって、生徒個々の伸ばすべき点、改善すべき点もはっきりしてくる。

2 自己教育力の育成につなげる生徒理解

(1) 生徒理解の必要性

学級担任が、生徒一人一人に自己教育力を育てる援助・指導を行うには、より細かな生徒理解が必要になる。自己教育力の内容とされる、生き方の探求、学習意欲、学び方の習得を援助するためには、生徒の興味・関心、適性、知能、学習習慣、家庭環境、身体状況、心理状態など、さまざまな面からの理解がなくてはならない。生徒をよく知っていれば、最適の援助ができるに違いない。一人一人をより深く理解していることが、学級の人間関係づくり、教科、道徳、特別活動の経営、教室環境の整備にも生かされ、生徒個々の良さや可能性を引き出すことにもつながってくる。生徒理解は、学級経営の基底をなすものである。

(2) 教師の基本姿勢

さまざまな方法で多くの資料を収集しても、日々変わっていく生徒を理解することは容易ではない。また、生徒の行動が変容し、向上への意欲を持ち、自ら学ぶ力を育てるために、教師として何をした

ら良いかが問われている。どのように生徒と関わり、いかに援助・指導すれば良いのかが見えてきてこそ、真の生徒理解といえる。そのための学級担任の基本姿勢についてまとめる。

- ① 生徒の欠点を探すのではなく、良さや可能性の発見に努める。生徒の長所を見つけ、それを生徒に伝えることで、生徒は自己有用感をもち、教師との信頼関係も生まれてくる。
- ② 教師と生徒が共に汗を流し、語り合い、行動を共にする日常の触れ合いを通して生徒理解に努める。そうすることで、生徒とのより良い人間関係が育ってくるものである。
- ③ 調査、検査の結果をうのみにしない。広い視点、柔軟なものの見方で、総合的に生徒を理解する。
- ④ 生徒理解とは、生徒と教師の人間的な心の触れ合いを通して得られるものである。相手の身になって考え、受容できる柔軟な姿勢が必要条件となってくる。目の前にいる生徒が、いま何を感じているか、何を考えているのか、生徒の心にできるだけ近づいて共感し、あるがままに理解しようとする方法である。この生徒の立場にたった共感的な理解は、生徒に安心感や信頼感を与えるので、生徒が心を開いてくれる。

3 生徒理解を生かした教育相談

生徒理解は、「生徒の望ましい人格形成への援助」＝「自己教育力の育成」につながるものでなくてはならない。生徒理解が資料収集、調査のみに終わってしまうことがないよう、具体的な教育相談という実践に結びつけていきたい。

(1) 学級担任による教育相談

学級担任による教育相談は、悩みや不適應の問題をもつ生徒だけでなく、学級の生徒全員に対して行うものである。学級担任は、日常の会話や観察、行動を共にする機会も多く、生徒一人一人に対する資料も豊富に持っている。担任が理解したことを通して、共感的・受容的な態度で生徒に向き合い、じっくりと話し合うことで生徒は自己を見つめることができ、新たな意欲が湧き出てくるのではないか。つまり、愛情や承認の欲求が満たされたとき、人間は意欲的になることが心理学的にも証明されている。学級担任が行う教育相談の内容としては、学習や進路に関すること、生活の適應に関することなどがある。よりの確な生徒理解を教育相談に生かすことによって、生徒は自己理解を深め、自分にとってのより良い生き方を見つめ直すことができる。

(2) 生徒理解と教育相談の年間計画

生徒理解を教育相談に生かすために年間計画を作成した。年間計画を立てることで、生徒一人一人に援助・指導が行き届くことになり、多面的・多角的な生徒理解にもつながっていく。学級集団の中で個を生かすためには、集団の理解と個別理解の両方とも欠かせない。そこで、生徒理解は、集団理解と生徒個々の理解ができるよう配慮した。また、全教育活動で「自己教育力の育成」がなされるべきであるが、特に学級担任は、生徒理解、教育相談、道徳、特別活動、生徒指導との関連で援助・指導を図ることが大切である。

この年間計画の関連を図式化すると、次のようになる。

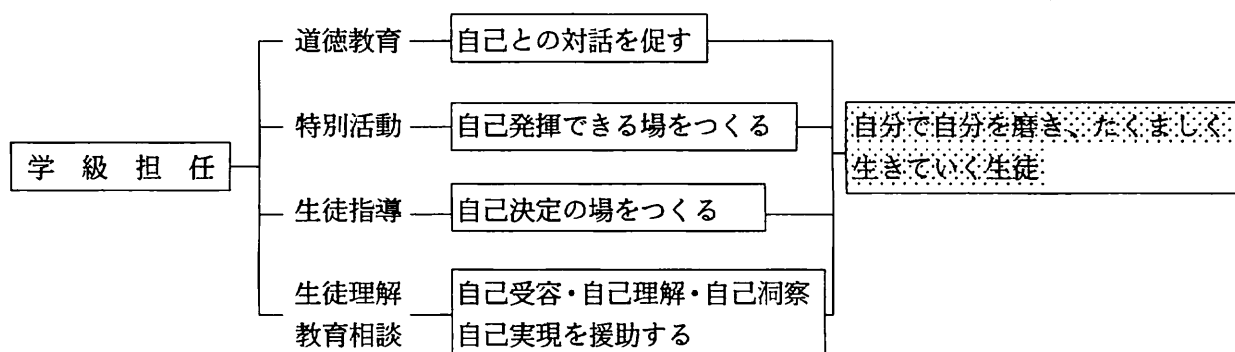


図1 自己教育力を育てる学級担任と生徒との関係

表1 自己教育を育てる生徒理解・教育相談・道徳・特別活動・生徒指導の年間計画

(中学1年)

学期	月	生徒理解	資料収集の方法	教育相談	道徳教育	特別活動	生徒指導
一学期	4	・生徒一人一人の特徴をつかむ	・小学校指導要録抄本(写し) ・家庭訪問調査票 ・身体測定の結果 ・家庭訪問 ・中学生になって決意(作文) ・担任による触れ合いと観察	・生徒と心のつながりがもてるよう、意図的にできるだけ数多く一人一人の生徒と接する	・礼儀 ・感謝と思いやり ・生命の尊重	・中学校生活の不安を取り除き、新しい生活に早く慣れさせる ・学級活動の意義を知り、積極的に参加する態度を育てる ・中学校の学習について理解させて、学習上の不安を取り除く	・集団の一員としての自覚を持つ
	5	・生活への不適応傾向生徒の早期発見に努める ・指導上特に配慮を要する生徒について理解する	・ソシオメトリック・テスト ・ゲスフウ・テスト ・知能検査・学力検査 ・定期テストの結果 ・定期テストの取り組みの反省 ・担任による触れ合いと観察	・定期相談(個別相談) ・連休明けに実施し、信頼関係を築くことに重点をおく	・自主自立 ・家族愛 ・反省と向上 ・国際理解と平和	・校内球技大会への参加を通して、互いに協力し合う態度を育て、クラスの団結を図る ・将来を見通した中学生としての心構えを育てる ・学級組織や係活動を見直し、問題点の改善を図る	・自分の役割を責任を持って果たすことができる
	6	・学級集団の人間関係を把握する ・生徒一人一人の友人関係の把握に努める ・生徒一人一人の健康状態を把握する	・学習・生活に関する悩み調査 ・健康診断の結果 ・進路希望調査 ・定期テストの結果 ・定期テストの取り組みの反省 ・担任による触れ合いと観察	・呼び出し相談 ・学習・生活面で不適応をきたしている生徒への個別的な適応指導を進める	・郷土愛 ・友情・信頼 ・自然愛 ・基本的生活習慣	・授業に臨む態度について考えさせ、全員が協力して学習する意欲的態度を育てる ・これまでの学習の仕方を反省させ、不得意教科の原因を明らかにさせ、学習方法の改善を図る ・健康診断の結果を知らせ、自己の健康について意識の向上を図る ・自主的・主体的な進路選択ができるような態度を形成する	・規律正しい生活習慣を身につける
	7	・指導上特に配慮を要する生徒への理解を深める ・生徒一人一人の生活姿勢の把握に努める	・家庭学習の状況 ・学習・生活に関する自己評価 ・一学期の反省(作文) ・夏休みの過ごし方(計画表) ・担任による触れ合いと観察	・グループ相談 ・部単位で夏休みの望ましい過ごし方について話し合う ・三者面談(個別相談) ・生徒の努力の足跡を認め、充実した夏休みにするよう話し合う	・健全な異性観 ・希望、勇気	・校内陸上競技大会への参加を通して、互いに協力し合う態度とクラスの団結を築く ・夏休みの意義を理解させ、充実した夏休みにするための計画を立てさせる ・身近な職業について、その概要を理解させる ・一学期の学習態度、生活態度を反省させる	・充実した夏休みにするための計画を立てる
	8	・生徒一人一人の生活態度の把握に努める	・電話やはがき ・日番活動				・自己の立てた計画に基づき、余暇の有効活用に取り組める
二学期	9	・学級集団の人間関係を把握する ・夏休み中の交友関係の変化の把握に努める ・学習・生活に不適応傾向のある生徒の早期発見に努める	・ソシオメトリック・テスト ・夏休みの反省(計画表) ・二学期を迎えて(作文) ・担任による触れ合いと観察	・定期相談(個別相談) ・学校生活を充実させるための相談を行う ・学習・生活への適応指導を進める ・不適応傾向のある生徒への適応指導を進める	・人間愛 ・社会的役割と責任 ・礼儀	・係・当番活動のあり方について考えさせ、係活動の計画を立てさせる ・働くことの意義を考えさせる ・男女の相互理解、相互信頼、人格尊重、助け合いの必要性を理解させ、好ましい人間関係を育てる	・規律正しい生活を送る
	10	・生徒一人一人の内面理解に努める	・生徒理解カード(POEM)検査 ・定期テストの結果 ・定期テストへの取り組みの反省 ・進路希望調査 ・担任による触れ合いと観察	・チャンス相談 ・呼び出し相談 ・不適応傾向のある生徒への適応指導を進める	・生命の尊重 ・遵法、権利義務 ・愛校心 ・勤労と社会への奉仕	・学級意見発表会への取り組みを通して、身の周りの問題点に気づかせ、その改善などを考えさせる ・人にはいろいろな個性があることを理解させ個性と進路の関連性についてわからせる	・学習や運動に意欲的に取り組む
	11	・学習・生活への不適応生徒を把握する	・学習・生活に関する悩み調査 ・家庭学習の状況 ・読書統計 ・担任による触れ合いと観察	・グループ相談及び個別面談 ・進路相談を中心に行う	・友情・信頼 ・自主自立 ・家族愛 ・広い心	・読書の意義を理解させ、読書の習慣を養う ・生徒会活動の組織と目的を理解させる ・合唱コンクールへの参加を通して、学級の団結を強める ・合唱の楽しさを味わい、歌声のある明るい学級にする ・社会見学に参加することを通して、学年・学級の親睦を深め、安全・機敏に行動する態度を育てる	・自分にあった効果的な学習方法を工夫する ・進んで読書する習慣をつける
	12	・生徒一人一人の適応状況を把握する	・学習・生活に関する自己評価 ・定期テストの結果 ・定期テストの取り組みの反省 ・二学期の成績 ・二学期の反省と冬休みの過ごし方(作文) ・担任による触れ合いと観察	・三者面談(個別相談) ・これまでの反省と新しい年へ向けての生活改善を目指す	・国際理解と平和 ・基本的生活習慣	・現在の自分と個性を知り、これからの進路に役立てる ・募金活動に取り組むことにより、ボランティア活動に対する関心を高める ・二学期の反省をさせる ・冬休みの意義を理解させ、有意義な過ごし方を考えさせる	・ボランティア活動に積極的ににかかわるようにする
三学期	1	・学級集団の人間関係を把握する ・生徒一人一人の友人関係を把握する	・ソシオメトリック・テスト ・進路希望調査 ・担任による触れ合いと観察	・定期相談(個別相談) ・充実した学期にするための相談を行う	・人間愛 ・生命の尊重 ・理想の実現	・適性の意味を理解させ、自己の適性に合った進路選択をしていくことの重要性を理解させる ・冬季における健康の保持や安全について理解させ体力の増進に努めさせる	・希望に満ちた生活設計を立てる
	2	・特に指導を要する生徒への内面理解に努める	・定期テストの結果 ・定期テストに対する取り組みの反省 ・家庭学習の状況 ・担任による触れ合いと観察	・チャンス相談 ・呼び出し相談 ・特に学業不振児、生活不適応の生徒への相談を行う	・自主自立 ・正義、公正公平 ・社会的役割と責任 ・人間の弱さと強さ	・自分の進路を開拓するために、現在どのようなことを考え、実行したらよいか検討させる ・学級レクを通して、学級の楽しい雰囲気盛り上げ、望ましい人間関係をつくる	・公共物を大切に、教室内外をきれいにする
	3	・生徒一人一人の適応状況を把握する	・一年間の学習・生活に関する自己評価 ・一年生の反省(作文) ・担任による触れ合いと観察	・個別相談 ・一年間の成長の足跡を確認させるための相談を行う	・国際理解と平和 ・愛国心	・一年間を振り返り、一年生としてのしめくくりをさせる ・卒業生の新しい門出を祝福するための取り組みをさせる	・一年間の反省をし、次年度への計画を立てる

(3) 学級教育相談の意義とねらい

学級担任が行う教育相談は、面談が中心となる。その面談の意義とねらいについてまとめる。

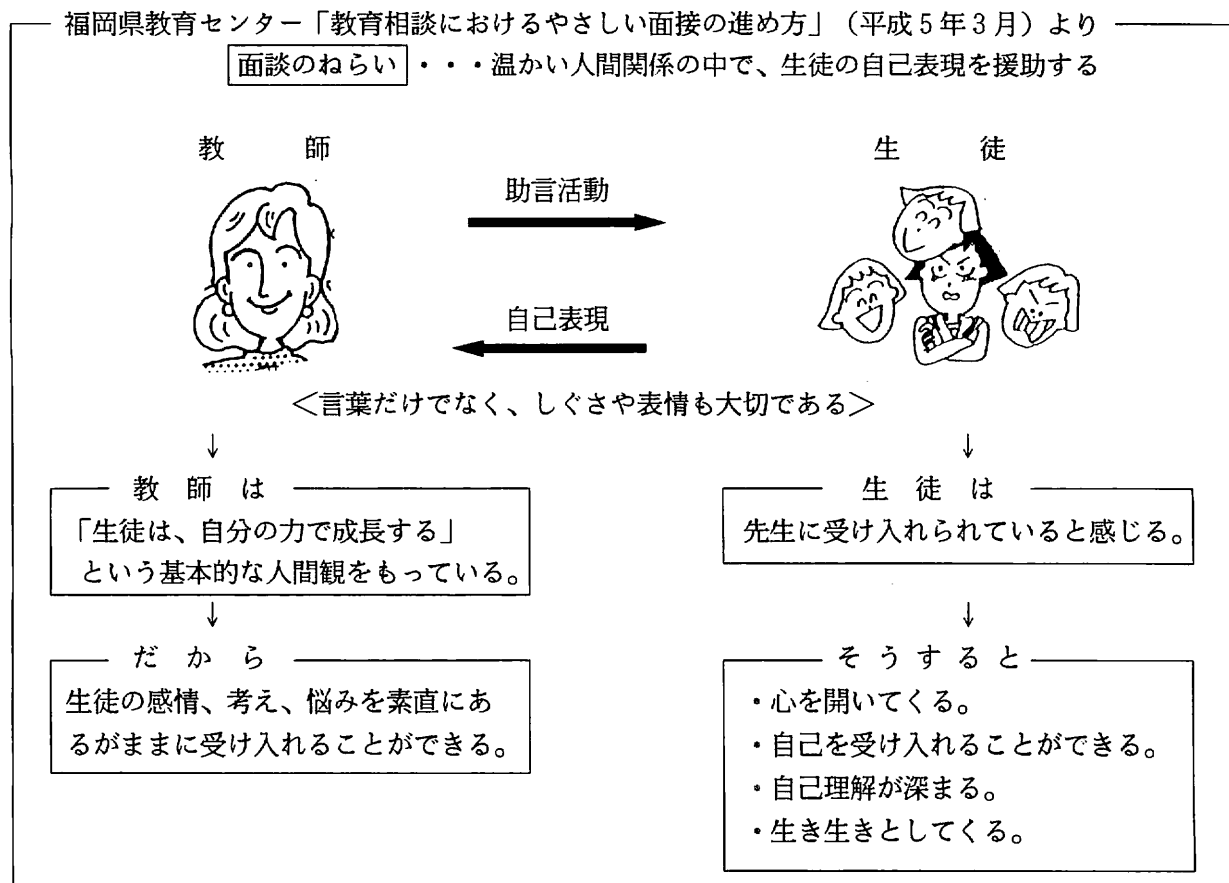


図2 学級教育相談の意義とねらい

(4) 教育相談カードの作成

収集した資料を整理し記録することが、生徒をよく知ることにつながり、ひいては生徒の変容を把握することもできる。そのための教育相談カードである。学習や進路に関するものと、生活の適応に関するものの二つに分けて作成した。大きさはいずれもB4判で、2枚綴り合わせて使用する。

なお、教育相談カードについては、紙面の都合上、割愛する。

IV 実践

1 学級の実態

(1) 日常の観察より（4月～9月まで）

男子21名、女子17名、合わせて38名からなる中学1年生の学級である。本中学校へは、村内の三小学校から入学してくる。入学当初は、同じ小学校の出身者同士一緒に行動する傾向が見られた。

担任が観察する限りにおいては、小集団を編成して活動する清掃活動、給食当番活動などの協力体制もよく、仲間同士から「怠けて困る」と担任に訴えられる生徒はいなかった。

中学生になったという新鮮な気持ちと緊張感などがあって、学級の雰囲気としては、男女ともに素直で明るく、他の教科担任からも授業のやりやすい学級という評を得ていた。

(2) ソシオメトリック・テストによる分析

日常の観察のみで、学級集団の人間関係を十分に把握することは困難である。ソシオメトリック・

① ソシオメトリック・テストの分析(平成7年5月実施)

望ましい友人関係を築いていく上で、担任として、特に配慮を要する生徒は3名であった。男子1名から選択され孤立児にはなかったものの、女子からの排斥が多いA男、誰からも選択のなかった孤立児K夫、男女両方から「規則を守らないルーズな人」(5月実施のゲス・フウテストより)と評価されているC子である。このC子は、相互選択が一つあって孤立児とはなっていない。この3名については、学級集団に認めてもらえる場をつくるのが仲間づくりの第一歩だと考え、それを実践するよう心掛けた。例えば、放課後残して学級の仕事をやってもらう。そのことを翌日の朝の会で、担任が学級全体に報告する。また、係活動や清掃・給食などの当番活動で頑張っている姿を、学級通信に載せ紹介するなどである。

被選択(C)の計147と、被排斥(R)の計73を比べ、その差し引き(CRS)を見てみると、プラス74になる。この数字からみると、学級成員間は調和関係にあるとみてよい。

徒を排斥している。このことから、特定の男子生徒が女子生徒に対して好ましくない接触をしているのではないかと考えられる。

社会测定 地位階層		名	I	II	III	IV	V	C	R	CHS	mC	mR	社会測定係数		
		前	TOMTYOTHGYYOGSSNMSKSKKKHTTKKI	TSTTTKMRYDMNTMKTNKK	KSKYATAEHI	TYSANSAKYHKT	MTI	級差	級差	C	H	S	平均差	偏差	社会測定係数
I 男 18	第一下位集團	TS							9	1	8	3	0	0.46	
		OT								7	0	7	3	0	0.39
		MT								7	1	6	3	0	0.38
		TT								7	2	5	1	0	0.16
		YK								4	0	4	5	0	0.33
		OM								4	1	3	1	0	0.44
		TR								5	2	3	4	0	0.44
		HY								6	3	3	1	0	0.41
		GD								5	2	3	4	1	0.34
		YM								3	0	3	3	0	0.34
		YN								3	0	3	3	0	0.24
		OT								3	1	2	3	0	0.32
		GM								6	6	0	3	1	0.20
		SK								6	6	0	2	2	0.00
		NT								2	3	1	1	0	0.11
		MN								4	7	3	3	0	0.35
SK								3	2	4	3	0	0.24		
KK								3	10	7	2	0	0.19		
II 女 8	第二下位集團	NS							4	1	3	2	0	0.34	
		KK								3	0	3	0	0	0.44
		KY								2	0	2	0	0	0.22
		HA								2	1	2	0	0	0.21
		TA								2	1	2	0	0	0.30
		KA								1	3	0	3	0	0.30
		KE								1	0	1	1	0	0.00
		IH								1	2	1	0	0	0.08
III 女 6	第三下位集團	TT							6	0	6	3	0	0.48	
		MY								5	4	1	0	0	0.45
		SA								4	3	4	3	0	0.45
		NA								5	0	5	1	0	0.16
		TN								4	0	4	4	0	0.45
IV 女 3	第四下位集團	TS							5	2	3	2	0	0.34	
		TA								2	1	2	0	0	0.21
		OK								2	1	2	0	0	0.21
V 女 3	第五下位集團	KY							2	1	2	1	0	0.11	
		MH								3	0	3	0	0	0.16
選抜班	選抜班	TK							3	0	3	0	0	0.04	
		IT								6	5	0	1	0	0.17
		平均	4.5	3.3	5.5	5.5	5.5	5.5	5.4	2.7	3.2	4.3	3.6	1.0	147
		偏差	0.0	2.0	1.0	2.0	1.0	2.0	2.3	3.1	0.4	2.5	3.0	1.2	3

一学期の孤立児KK夫についてみてみたい。一学期には、選択、相互選択ともに0であった。二学期をみると、被選択が2、相互選択が1になっている。ただし、男子生徒からの排斥が4、女子生徒からの排斥も6で、学級集団内での社会測定地位階層では最も下に位置している。

(3) 生徒理解カード（POEM）検査より

一人一人の生徒の学校及び家庭生活への適応状態を把握し、総合的な生徒理解につなげるために、生徒理解カード（POEM）の検査を実施した。これは、①受容感、②効力感、③セルフコントロール、④不安傾向、⑤対人積極性、⑥向社会性、⑦攻撃性、⑧原因帰属の八つの側面から、生活への適応状況を明らかにするものである。以下に、その検査結果をまとめる。

学級の全体的傾向をみると、適応型が21名で全国平均レベルに位置し、過剰適応型3名、不適応型7名、不確定型7名で、適応率で見る限り平均的な学級である。

不適応型の生徒のうち問題行動が予想される者は、男子に1名、女子に2名いる。男子1名は、予想される問題行動に、不登校、家庭内暴力、緘黙があげられている。担任が観察する限り、明るく几帳面な生徒である。家庭訪問での母親の話でも、素直で明るく祖父母からも可愛がられているとのことだったので、検査の結果は意外だった。女子2名のうち、一人は利己的・攻撃的非行、いじめの問題行動が予想され、もう一人は、怠学・利己的非行・攻撃的非行が予想されるとの検査結果だった。二人とも学校生活の中で観察する限り、学級のムードメーカー的な存在であり、係活動などもきちんと行う生徒である。担任の観察とは異なる検査の結果に、生徒の内面理解の難しさを痛感させられた。

2 学級担任としての援助のあり方

(1) 学級集団への援助のあり方（二学期のソシオメトリック・テストの分析から）

本学級では、男女相互の排斥が多いことから、係活動を通して男女の共同作業を数多く取り入れること、道徳の授業や学級活動で、男女の理解や協力に関する指導を重点的に取り入れていく必要がある。ただし、中学校1年という、第二次性徴期の初期にあって、異性に対する興味や関心が、逆に異性に対する攻撃的な言動となって現れることにも配慮しておきたい。

(2) 生徒一人一人への援助のあり方

ソシオメトリック・テストで排斥の多かった生徒への排斥原因を調べてみると、授業中、周囲の人にいたずらする、たたく、ばかにする、からかう、うるさい等が排斥理由としてあげられている。授業態度に原因があり、学習意欲、学習の仕方を含めた教育相談が必要だととらえた。また、生徒理解カード（POEM）の検査で不適応との結果が出た生徒については、担任としてより緊密な接触を心掛けていく必要がある。担当教科の時間は勿論のこと、道徳・学級活動、給食・清掃時間、休み時間などを利用し、気軽に声をかけ接触を図っていきたい。良く観て、良く聴くことが心の交流を生み、内面理解につながっていくからである。

3 個人相談実践例

(1) —— 孤立児K夫への援助と指導 ——

① 事例の概要

K夫は、一学期のソシオメトリック・テストにおいて、男子6名、女子4名から排斥された。女子4名のうち2名は、相互排斥になっていた。排斥されている原因をみると、男女ともに、授業中、人の体をたたく、うしろから鉛筆でつつく、おしゃべりが多いという点をあげている。また、ゲスフウ・テストの集計結果からすると、教師がいないとき掃除を怠ける、自分に都合のいい審判をするという項目で男子4名、女子3名から名前が記入されていた。休み時間、K夫と行動を一緒にしていることが多い男子2名からも、自分勝手であるとして指摘されている。

② K夫の家族構成と学校での様子

K夫の家族は、両親、姉弟の6人から成る。姉が2名、弟が1名の姉弟で、両親は共働きである。学校からのアンケートなどにも丁寧に答えて期限内に提出するなど、両親の教育に対する関心は高い。K夫は、家の手伝いをよくやると母親から評価されている。学業成績は学級の中で下位に位置する。

担任には、積極的に話しかけ、部活動や友人関係などについても、躊躇せず相談にやって来る生徒である。学級の仕事はよくする。学級役員にも自ら進んで立候補し、みんなから承認された。校内陸上競技大会でも活躍する。

③ 援助・指導の経過

K夫が学級集団から排斥されている原因は、授業中の態度にある。また、共に行動している友達から、自分勝手だと指摘されているのをみると、わがままな部分もあると考えられる。授業中の態度については、担当教科の時間、道徳、学級活動の時間などに注意深く観察し、直接指導を心掛けた。また、K夫の働きをみんなに認めさせることで、K夫の存在感をアピールした。一方、授業中落ち着きがない原因には、授業内容が理解できないこと（基礎学力の不足）、学習意欲の欠如なども考えられ、家庭学習を励行した。家庭学習の提出状況は良くない、また、ノートの使い方は乱雑で、漫画のヒーローなどを描いたり落書きも目立つ。三者面談、チャンス相談を通して、家庭学習の習慣化を促したが、授業態度の改善にはつながらなかった。

④ まとめと考察

自我に目覚めてくる中学生にとって、仲間から認められることの意義は大きい。仲間からの排斥が定着してしまうと、さまざまな不適応行動や問題行動が引き起こされてくることになる。K夫の場合は、本人が明るく行動的だったので、次第にクラスの仲間から受け入れられるようになってきた。一学期の半ば6月には、他の小学校からきた男子生徒と友達になり、お互いの家を行き来するまでになっている。二学期に実施したソシオメトリック・テストをみると、男子間では、相互選択1、被選択数2になっているが、女子からの排斥は相変わらず多い。排斥される原因は、一学期と同じく授業中の態度があげられている。授業に集中できないことが要因であり、その原因を見極めていく必要を感じる。原因を把握した上での、きめ細かな継続した援助・指導を行っていくことで、女生徒からの排斥も減少するものと考ええる。

(2) — 学業不振児A男への援助と指導 —

① 事例の概要

A男は5人姉弟の長男である。2歳違いの姉1人、妹2人、弟1人、両親、祖父母の9人家族である。健康状態は良好で、体は小柄な方である。性格は明るく、教師にもよく話しかけてくる。休日に友達と遊んだこと、テレビを長時間視聴したことなど、休日の過ごし方や家での様子について話すことが多い。清掃当番、給食当番など当番活動は真面目にきちんと行っている。将来は、船員になることを望んでおり、水産高校への進学を希望している。趣味は機械いじりである。一学期の欠席日数は、風邪による欠席が1日である。5月に実施した全国標準診断的学力検査の結果からみると、全国偏差値は国語39点、数学36点となっている。学力成就値は-8で学業不振児と診断される。A男の授業態度をみてみると、おしゃべりや立ち歩きなどは見られないが、ノート、教科書などへの落書きが目立ち授業に集中していない様子が伺える。家庭訪問では、家での勉強を全くしないので困っているとの母親の話があった。

中学校の生活にも慣れた5月の始め、学級で家庭学習についての話し合いを行う。家庭学習の習慣を身につけるといふねらいのもと、全員が家庭学習帳を毎日提出することになった。A男の家庭学習帳の提出状況は、5月は7回、6月に4回であった。

② 援助・指導の経過

5月の半ば頃、呼び出し相談を行った。家庭学習ができないのは、テレビ、漫画に時間を奪われているからだ話す。6月、再度、個人面談を行う。このときは呼び出し相談ではなく、中学校生活への適応の状況をみるために、クラス全員に実施したものである。A男とは、家庭学習の仕方を中心に相談をする。本人は勉強しようと思っても、眠くなってしまうと話す。家庭学習についてのアンケート結果からみると、学習計画は立ててないこと、宿題は忘れてやらない日が多いこと、教師や親の注意は素直に聞けること、授業中、教師に質問されると胸がドキドキすること、テスト

前になると、勉強について不安になることなどがわかった。それからすると、勉強の必要性を感じつつも、実行に移せないでいることがわかる。家庭学習をしない原因は、A男の意志の弱さにあると考え、家でできなかった時は、放課後や休み時間などを利用して、学校で勉強することになった。ところが、家でやらなくても学校でやればよいというA男の意識が芽生えてしまったようで、家庭学習の習慣化にはいたらなかった。

③ 問題に対応するために

学業不振の原因としては、個人に内在する要因と環境的な要因とに分けて考えられている。個人に内在する要因としては、学習習慣の欠如、意欲や興味の欠如、基礎学力の不足が指摘されている。環境的な要因としては、学習内容が高度化して難しくなっていること、一斉に指導することの多い指導方法の問題、親の放任、逆に勉強への過剰な期待などがあげられている。A男の場合は、環境的な要因よりは、学習習慣、基礎学力不足など個人に内在する要因が強いと思われる。

④ まとめと考察

やみくもに勉強しなさいと強制するのではなく、A男が、どの学年、どの領域でつまづいているのかを見つけてあげることが大事であろう。そのためには、中学校の学習内容だけでなく小学校の問題もさせてみる必要がある。そして、つまづきを発見したらそこからスタートさせることである。能力にあった家庭学習の課題を用意し、やればできるという達成感や満足感を味わわせるよう工夫を重ねながら、長い目でみて継続的に援助・指導してあげることが大切である。

本事例においては、A男に家庭学習をさせることを追求するあまり、A男のつまづきがどこにあるかをじっくり見極めることができなかった。目の前の問題の解決に焦り、根底にある原因をしっかりと見抜くことができなかったのである。また、家庭との連携を図りながら、長い目でA男を温かく励ましていく心のゆとりが必要だと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

自己教育力、学級経営、生徒理解、教育相談について、主に文献による研究を行ってきた。現在、声高く叫ばれている生涯学習社会における学校教育の役割を自分なりに捉えることができた。学校教育の中で自己教育力を育てることが、生涯学習社会に生きる人間の育成につながるものであることが認識できた。さらに、学級経営で自己教育力を培うための、学級担任としての生徒へのかかわり方が明らかにできた。文献による研究と併行して、自分の実践を振り返り、生徒一人一人を理解することの重要性、共感的理解を生かした教育相談の必要性を実感した。また、生徒理解・教育相談を学級経営に生かす過程では、教師がさまざまな取り組みを通して、学級集団や生徒個々に関与することになる。そこでは、学級担任の人間性が大きく影響してくることになり、教師の自己研鑽の必要性を痛感した。

2 今後の課題

- (1) 教育相談を効果的に行うため、カウンセリング技術の習得とその向上を目指す研修に努めること。
- (2) 「自己教育力を育てる年間計画」を実践に移していくこと。
- (3) 道徳・特別活動の授業内容の充実を図ること。
- (4) 「教育相談カード」の効果的な活用を図ること。

<主な参考文献>

河野重男 編著	『自己教育力を育てる』	ぎょうせい	1988年
北尾倫彦 編集	『自己教育力を考える』	図書文化	1987年
全国中学校学年学級経営研究会 編	『中学校学級経営1年』	国土社	1985年
全国教育研究所連盟 編	『学級担任による教育相談の展開』	東洋館出版社	1989年